

名作コンシェルジュ



Book

アラン・シリトー 「長距離走者の孤独」



非行少年の切実な事情 青春香る「疾走系」文学

『長距離走者の孤独』が刊行されたのは60年前の1959年。50年代は大戦の惨禍に見舞われた40年代や、騒乱と解放の60年代と比べるとあまり脚光を浴びないが、英国ではキングスリー・エイミスやジョン・オズボーンなど「怒れる若者たち」と呼ばれる作家や劇作家が台頭し、変化の胎動が感じられた時期だった。

「怒れる若者たち」の多くは中下層階級の出身。英文壇を支配したエリートたちとは作風もメンタリテイも異なる。シリトーも労働者階級の出で、本作でもその視点が生かされ、英国のある階層の鬱屈した微妙な気分をよくとらえている。

お薦めは表題作の「長距離走者の孤独」だ。まずはその読み心地に「うわっ」と仰け反るのもいい。「おれ」の話しぶりはいかにも不良で、「パクられる」とか「サツ(警察)」といった刑事物ドラマ風の俗語だらけ。教養のなさそうな、乱暴でやけくそな荒々しさだ。

しかし、そこがまさに本作品の醍醐味。読むうちに熱気と勢いに引き込まれ、主人公の事情が切実な真実味を帯びる。じくじくした恨み言だらけの「やけくそ語り」も痛快に感じられる。しかもあちこちに笑いの種。読み心地はけっこう爽快なのだ。

主人公のスマイスは典型的な非行少年だ。日常的に軽犯罪を犯し、警察もマー

クする。ある日、ワル友達とパン屋に窃盗に入り、逮捕されて感化院へ。

本番はここからだ。感化院でスマイスはランナーとしての才能を見いだされ、クロスカントリーの選手として鍛えられる。本人も走ることに自信とこだわりがあった。そして大会本番。感化院の院長には、真人間になれ、と激励されるが、そんな院長には虚栄心しかないことをスマイスは見抜く。だから1位で到着しながら、ゴール寸前で走るのをやめてしまう。彼なりの抵抗であり、誠実さだった。

短い作品だが、作家の多彩な技術がたっぷり生かされる。困窮生活にはスカッと開き直るようなたくましさがある。盗盗を犯して逮捕されるまでの回想部分には手に汗握る緊迫感。そして、何と言っても最後の疾走場面だ。息をつかせぬ文章のテンポは、疾走するランナーの心臓の鼓動をとらえ、心に去来する思いは、飛びすぎる風景の断片と重なる。走ることに語ることがここまで重なるとは、実に美しい。

ホイットマン『草の葉』からサリンジャー『ライ麦畑でつかまえて』やケルアック『旅路』まで「疾走系」の文学には青春の香りが漂い、大衆の声が聞こえる。だが、その多くは米国発だった。「長距離走者の孤独」は英国文学に新しい風を吹きこんだのだ。

英文学者 阿部公彦

アラン・シリトー(1928~2010年)は英中部の工業都市ノッティンガムに工場労働者の息子として生まれた。19歳で英空軍に入隊後、肺結核の療養中に創作を始める。本書は新潮文庫。丸谷才一、河野一郎訳。税別490円。労働者階級の日常を躍動感あふれる文体で描いた8つの短編小説を収める。